西宮YMCA救援活動
はらたち日記

山口　元

寄贈

震災文庫 7－300

西宮YMCA救援活動はらたち日記

東日本のYMCAは西宮YMCAを中心として　救援・復興活動を展開した（東本部の事務局は大阪YMCAに設置された）

00098105256

我が家に大震災がやってきた

1月17日午前5時46分。下から突き上げる1度目の揺れで妻の裕子と2人ベッドから天井に当たるほど宙に浮いた。ベッドに落ちるまでの間の一瞬に「これは地震だ、死ぬかもしれない、なんで神戸なんや大震災は東京やろう。くそ!!（東京の人すいません。）」…などなど頭の中を駆けめぐる。激しい左右の揺れがおさまって、ベッドに倒れかかってきた本棚を乗り越えて、埃の舞い上がる中、隣の部屋の2段ベッドの下で寝ている小学3年生の次男の航（わたる）を救出にいった。部屋中の家具は倒れ、ピアノが1メートル以上動いていたが、幸い怪我もなくベッドにちょこんと座っていた。真っ暗な中、ガスの元栓を締めるために倒れた家具を乗り越えて台所までたどり着いた。そこには年に数個ずつ買いそろえて大切に飾っていたガラス食器と陶器の破片で凶器の山ができていた。知らぬ間に数カ所足を切っていた。電気はつかない。水も出ない。

新神戸駅前の実家オリンピア幼稚園に住む中3の長男宰（つかさ）と母親の洋子に電話をするが通じない。妻と相談して一人で実家に向かうことにした。地下のガレージに行くと2段式ガレージの上に止めていたワゴンは下に落ちていた。下に止めていたセダンはもう一段下の隙間に頭からつっこんでボンネットがぐちゃぐちゃになっている。セダンは諦め、祈るような気持ちでワゴンのエンジンをかけた。一瞬ためらってエンジンはかかってくれたが、電動のシャッターが開かない。どうやってあけたか記憶にないがとにもかくにも道路に飛び出して43号線へと向かった。外はま

だ真っ暗でヘッドライトの照らし出す芦屋の町の悲惨な光景に気づきもせずただひたすら走った。この時点では、まだことの重大さを全く理解出来ていなかった。現実を思い知らされたのは43号線に入ったとたんだった。高速道路の入り口を探す目に飛び込んできたのは根元から倒壊した巨大な阪神高速神戸線だった。その瞬間手はふるえ足はふるえて目から涙が吹き出した。長男宰　と母洋子はもう生きてはいないだろう。そんな恐怖が頭を埋め尽くした。そして祈った。ただただ祈りながら神戸へと向かった。寸断された道をどこをどうやって行ったか全く記憶にない。何かに導かれたように幼稚園にたどり着いた。そこで見たのは全壊した哀れな幼稚園の姿と逃げ出したウサギと鶏を追いかけている長男と母親の姿だった。心配させやがってバカヤロー!!。ただただ神様に感謝した。神戸ミカエル教会に3人で行き秋山牧師に会い、祈った。教会は礼拝堂の天井が数カ所落ちていたがその躯体には大きなダメージは見あたらなかった。この日以降、交通が復活するまでの約3ヶ月実家と教会には行けなかった。

倒壊した阪神高速

長い渋滞の末やっと家に帰れた。電気はその日のうちに復旧したが、水とガスのない生活には都会人、特に子供たちは耐えられなかった。翌日受験を控えた長男は大阪市の同級生の家に、次男と義母の小林節子は吹田市の親戚宅に疎開をした。気がつけばマンション全戸の住民は私と家内の2人きりになっていた。このころ芦屋市の人口は半分以下になっていたと言う。子供たちが

家から出たがったのは不便さからだけではない。止めどもなくおそう余震の恐怖から逃れたかったのだろう。とくに次男の航はあまえたで親から離れて泊まりに行くことなどほとんどなかった。その彼が自ら進んで出ていったのだからその恐怖は尋常ではなかった。

生活していく上でやはり一番困ったのは水だった。特に水洗トイレの水が出ないのには閉口した。マンションの3階まで20リットルのポリタンクを一日何度も運ぶ。運んだ水は炊事、洗面に使ったあと便器のタンクに入れた。直接流すとかえって量がいる。小は流さず大だけ流す。紙の使用は最小限にする。雨が降った日はベランダにシートをはって水をためてトイレに使った。運良く我が家のトイレが詰まることはなかったが、多くの家ではトイレを詰まらせて地獄を見ていた。トイレ詰まりを防ぐために、マンホールのふたを開けてその上にテントを張り直接流している地域もあった。洗濯と風呂はとても無理なので、家内が昼に大阪の親戚までいってさせてもらった。結局私は水の出るまでの1ヶ月半、風呂に入れなかった。水が出てもガスが出ないのではり風呂には入れなかったがカセットコンロで湯を沸かして行水程度はできるようになった。

我が家は家具の転倒防止対策は全くしていなかったため散々たる状況で、命があっただけ幸運だった。そんな中で無傷だった部屋が1部屋だけあった。全て建て付けの家具でかく扉に鍵のかかるものだ。転倒もせず中身も飛び出さなかった。母親の家は金壊したが食器棚は大きく動いたが引き戸だったので中身が飛び出さず無事だった。扉の鍵と引き戸・建て付けの家具・転倒防止具は有効だった。我が家のマンションは最新の防犯システムでテレビモニターと自動ドアーがついている。震災後もそのシステムは完璧だったが、肝心の外塀は完全に倒壊していたので、誰でもどこからでも入れた。それに気づかずに、律儀にモニターのチャイムを鳴らし自動ドアーを開けてもらってはいっていたのは私だけだった。まるでマンガだ。

弟の光は東灘区住吉に独りで住んでいたが、やはり全壊して命辛々逃げ出してきた。山口家は全壊、全壊、半壊の3連発だと嘆いていたら、大阪青年会議所の後輩が見舞いにきて奥尻と普賢岳では全壊1件につき1500万円ほどの義援金が出たと教えてくれた。我が一家の場合は3連発で4000万円ぐらいもらえる。みんなで小さいマンションにでも住んでと計算していた。義援金が出たと喜んで行ってみると、25万・25万・15万、三軒合わせてたった65万円だけだった。被災者の絶対数がちがうのだそうだ。義援金、義援金と大騒ぎだったが、分配してみると全壊1件につき25万円しかなかったのだ。

避難所の開設

西宮ＹＭＣＡの近辺は震度7の激震地で夙川の土手に30～40㎝の段差が出来、半分以上の家が全壊し、70名以上の方が亡くなっていた。15家族50名の人がＹＭＣＡに避難してきた。西宮ＹＭＣＡには本館と別館があった。本館は鉄筋3階建てで主に幼児教室や体育教室、英会話、ＬＤ（学習障害）児クラスなどを行っていた。別館は4階建てで中高校生科、予備校を中心に事業を展開していた。建物の被災状況は、本館別館ともに本体には大きな損傷はなかったが、本館は給水棟が全損、変電器も全損していたため全く使用することが出来なかった。別館は給水棟が破損したものの電気系統は破損を免れていたため、50名の被災者の方には別館の予備校の教室に分散して入ってもらった。しかし、まず問題は未公認の避難所であったため食事や物資の配給が受け

られない心配があった。そんなとき「公認の避難所へ移ってもらいませんか。」と行政サイドから問い合わせがあった。内部からも教室が使えないとＹＭＣＡの復興はどうなるのかという不安の声が挙がっていた。不安が頭の中を駆けめぐった。「そうしてもらいましょう。」と答えるつもりがつい「ほっといてくれ!!」といってしまった。「もう後戻りは出来ない。一生居てもらおう。後は神様が何とかしてくれるやろ。」そう決断してから心が晴れた。内外の雑音などどうでも良くなった。行政も諦めて食料を持ってきた。こうなったら最高の避難所にしてやろうと思った。しかし、現実は教室は固定椅子だったために50ｃｍほどの椅子と椅子との間に寝てもらわざるを得なかった。水も出なかった。救いは電気の暖房が入ったことだ。他の避難所に誇れる最高のサービスだった。これが西宮ＹＭＣＡの救援活動の第一歩となった。

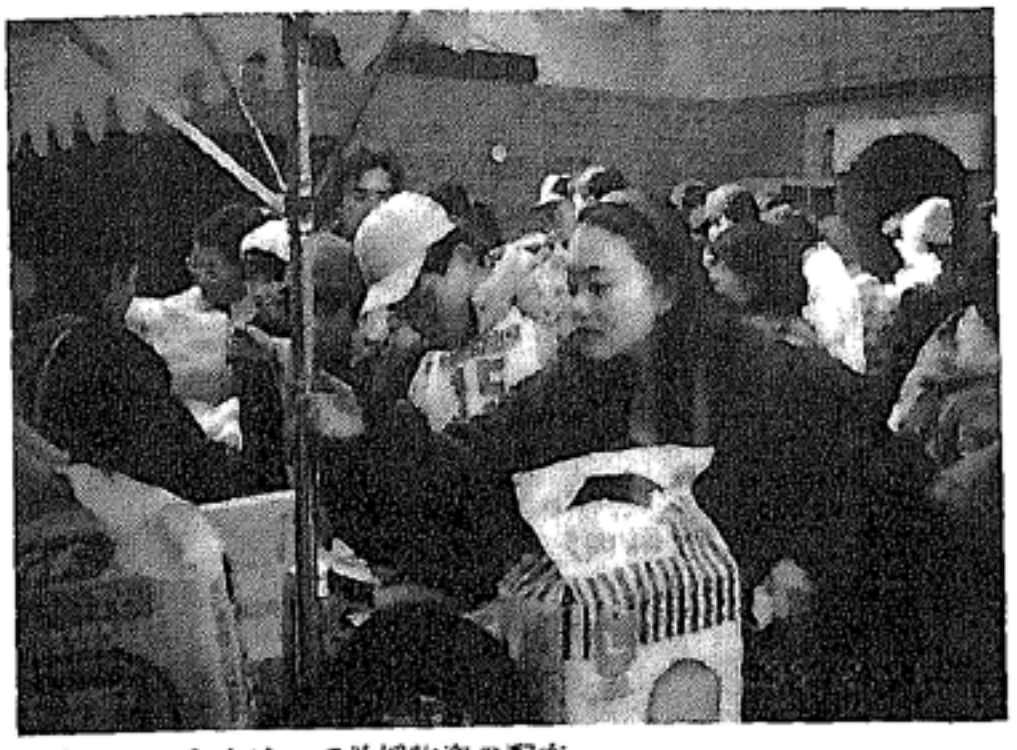
避難してきた50人の方々は小学生から80歳までで、大学教授、サラリーマン、工員、学生など様々な職業・年齢であった。全員が協力し掃除をし食事を運んだ。水のでない水洗トイレがつまらないようにとトイレットペーパーは流さずゴミ袋に入れて毎日焼いてくれた。１度も詰まることがなかった。避難所の多くはトイレがつまり大便がドアの外まであふれ出していた。トイレが詰まると言えば、応援に来ていた滋賀ＹＭＣＡの総主事上松氏がボランティアを集めてトイレの詰まった体験談をしてくれた。あんまり感動したのでここにご紹介する。氏は学生時代ガールフレンドの家に呼ばれ、夕食をたらふく食べた。便意を催しトイレにいったら馬鹿みたいに大きな大便が出た。流したが流れない。そこで、彼女の母親に菜箸を借りた。いろいろやったが流れなかった。諦めて母親にいった。「お母さん、この菜箸は二度と使えません。」トイレの流れない悲惨さを見事に表した含蓄のある話だった。ほんまかいな?。

2月いっぱいで全家族が出て行った。また全壊して更地にした自宅をＹＭＣＡの炊き出し場や物資置き場にと提供してくれた人達もいた。そのおかげでＹＭＣＡの救援活動は大きく広がっていった。

救援物資の配布

1月19日になると大阪ＹＭＣＡから１００名以上の大量のスタッフ・リーダー・ボランティアが入ってきた。20年間つとめた大阪ＹＭＣＡを私のわがままで退職して、神戸ＹＭＣＡに移り去年の4月に西宮ＹＭＣＡの館長に就任したところだった。後ろ足で砂をかけるように去った私を大阪ＹＭＣＡが最後まで全面的に支えてくれた。口に出してはどうしても素直にいえなかったが、心の中では本当に感謝していた。翌日には滋賀・奈良・京都・名古屋のＹＭＣＡ関係者が続々と駆けつけてきた。そして、東京、横浜、仙台、北海道など、東日本のＹＭＣＡは西宮ＹＭＣＡに、西日本のＹＭＣＡは西神戸のＹＭＣＡにやってきた。

まず救援本部を別館のロビーに設置した。そして本館の復旧にかかった。とりあえず1階の全教室を片づけ、電気の仮復旧工事をしてやっと使える状態にした。中庭は液状化現象で波打ち四隅がとくに大きく沈んでいたが何とか使えた。そこに集会用テントを五張り設置した。同時に全国のＹＭＣＡと全国の青年会議所から物資が入ってきた。また、アメリカ北カリフォルニア日本文化コミュニティセンター（ＪＣＣＣＮＣ）など海外の市民団体からも段ボール４００箱以上の衣料や人形などが届けられた。中庭のテントの下に机を置いて救援物資の配給場所にした。1日


中庭にテントをはって救援物資の配布

最大20トンの物資を食料品・日用品・衣料・薬品などのコーナーに分類して1日最大３０００人に配布した。特に人気があったのは、食料品では缶詰やレトルト、ガスボンベや下着類で我々の間ではゴールデン物資と呼んでいた。これらは下手に出すと奪い合いになってパニックになった。ＹＭＣＡでの物資配布は口コミでひろがり、遠くは神戸市や尼崎からも被災者が10時の開始2時間前あたりから長蛇の列を作ったため30分交代で入場制限をした。

弱々しい70才前後のおばあさんが毎日紙袋いっぱいの物資を受け取って涙ながらにありがとうございますと幾度も頭を下げて帰っていった。ある日偶然にそのおばあさんの後を歩いているとおばあさんはＹＭＣＡの角を曲がるなり紙袋から物資を取りだし、いらないものを全壊した家に投げ込んだ。全壊のその家の奥さんは震災でなくなっていたのだ。本当に申し訳なかった。まさに地獄のような光景だった。またＹＭＣＡの近所の豪邸の主人が毎朝物資の配給の列の1番に並んでいた。ネクタイをして通勤前に並んでいるのだ。それが問題になって私が遠慮して欲しい旨伝えることになったが近所のことだし言いにくかったのでぐずぐず引き延ばしていた。そこに神戸市灘区避難所から1通の物資の感謝の手紙が着いた。犯人は豪邸の主人で毎日ＹＭＣＡですと言って昼休みに自分の会社の近くの避難所に物資を配達してくれたそうだ。すぐに人を疑ってはいけない。聖

書にも人を裁くなと書いてある。結局物資の配給は3月末Ｈまで続けた。

郵パックが欲しい

2月15日頃テレビで避難所には物資が溢れていると報道されていた。自宅でそれを見た私はあるところにはあるもんだとおもった。その2日後にはＹＭＣＡに物資は全く入らなくなってしまった。テレビのバカヤロー!!と恨んだ。他のボランティア団体も困った。そして、西宮にＮＶＮの呼びかけで西宮のボランティア団体、応援する市民の会、朝日新聞厚生文化事業団、ＹＭＣＡなどの代表がはじめて集まった。集まってびっくりした。ＮＶＮの代表伊丈勉氏の片うで山形君は大阪東ＹＭＣＡの委員、関学の立木助教授は神戸ＹＭＣＡの委員、応援する市民の会の早瀬氏、東牧さんは北河内ボランティアセンター理事時代の仲間、朝日新聞の石田氏、中村氏はキャンプ仲間だった。かくして西宮にボランティアネットワークが出来た。ＮＶＮが中心となって関学・ＹＭＣＡなどが参加した。最初の議題は三田市に止まっている西宮市救援本部宛の42万個、大型トラック300台分の郵パックの開梱についてだった。問題は郵政省の職員でないとあけられないとか、現金や危険物が入っていたらとかでボランティアには開けさせられないのだそうだ。そんなあほな!!。山賊と呼ばれていた西宮ＹＭＣＡとしては焼き討ちしてでも欲しいと主張した。すったもんだがあったが結局ネットワークで開梱する事になった。

郵パックに限らないが、1つの段ボールに下着・防寒着・文房具におにぎりまで入れてるのが

ある。おにぎりなんか糸引いて納豆になってる。少しは考えろよバカヤロー!!もっと頭に来たのは送られてきた衣類の中にぼろぼろの上着や穴のあいたズボンや下着・汚れた下着などがどれほど多かったことか。文房具（鉛筆）と書かれた段ボールが数箱送られてきた。子供たちに配れば喜ぶと開けてみると5ミリ程に減った鉛筆がぎっしり詰まっていた。ものは大切にと書いてあった。ものを大切にするのはおまえだ!!。その鉛筆は送らないで君が最後まで大切に使うのだ。そして被災地の子供たちには真っ新な鉛筆を送るのだ。もっと心配なのは世界各地の災害に日本から物資を送っているが、国内でもこんな状況だから相手が弱者と思ったら何を送っているかわからない。今回海外から来た物資に決してこんなひどい物はなかった。本当に日本の恥だ!!。

マスコミ関係者にもお願いしたい。郵パックは分類しなくても良いように同じ物を1つに詰める。生ものは入れない、使い古していらなくなった物は被災者もいらない。ゴミは送るな。たったこれだけのことを伝えてもらえれば、今回の轍を踏むことはないのだから。

給水活動

水が出ない。結局ＹＭＣＡに水が出たのは3月1日だった。1月20日に徳島ＹＭＣＡが阿南市の２０００リットルタンク４個を運んできた。東京ＹＭＣＡは江東区の５０００リットルタンクを送ってきた。早速トラック3台に積んで西宮市の浄水場まで給水してもらいに行った。しかし結果は3台とも空で帰ってきた。「許可書がないと給水してもらえません。」思わず「あほー!!焼

き討ちしてでも取ってこい。」と追い出したらどんな手を使ったのか今度は満タンにして帰ってきた。結局それ以来水道が復旧するまでＹＭＣＡには５０００人の被災者が水を求めて毎日列を作った。

おじいさんやおばあさんがポリタンクを持ってくる。ボランティアが親切で溢れるばかりに水を入れて渡すと受け取ったおじいさんはその重さに腰を抜かした。自転車に乗せてあげると今度は転んだ。20リットルのポリタンクは子供や高齢者にはもてない。わかっていたが入れざるを得なかった。被災者は満タンにしないと納得しないのだ。多くの高齢者が腰を痛めていった。水道局にもすばらしい人がいて、ある日突然水道局の50リットルのタンク20個が届いて毎日それに給水しにきてくれた。その前に空のペットボトルをおいて自由に入れて持って帰れるようにした。高齢者や子供たちはペットボトルでもって帰るようになった。

診療所の開設

高齢者は腰を痛め、がんばってるお父さん、お母さんの中には骨折しているのに気づかない人や何針も縫うべき傷をバンドエイドで止めている人が大勢いた。病院はまだ復活していないし、少しぐらいの傷や痛みで病院には行けない。そんな雰囲気もあった。そんな1月25日に朝日生命の医師団が西宮ＹＭＣＡにやってきた。生命保険会社の医者は全科そろっているのだそうだ。別館1階の事務所を全部診療所にして近所にチラシを撒いたらいきなり１００名ほどの患者がきた。そこに日本ＹＭＣＡ同盟総主事宮崎幸雄氏が激励にやってきた。ＹＭＣＡ診療所の看板を見

多くの病院がつぶれていた

るなり感激してすぐに見たいと言う。先回りして診療所で医師・看護婦と緊張して待っていたら、宮崎氏がズボンをまくりながら入ってきた。「こけて膝小僧すりむいたからアカチン塗って」全員でずっこけて久しぶりに心から笑った。

暖房が故障中で寒い中で医師も看護婦も患者もがんばってくれた。2月に入ると市からクレームが付いた。近隣の医師の営業妨害になる。無認可の診療所は困る。医師会がうるさい等々。「ほっとけばかやろー!!」明治生命・大同生命とつないで結局2月いっぱいまで続けて終了した。

しかし、3月に入ってもお年寄りの腰痛、不眠症などの治療の要望が依然として多かった。そこに大阪南ＹＭＣＡメンバーの池永栖子さんを中心とした鍼灸師のボランティアのチームが入ってくれたので、日曜日と水曜日に針灸の診療所を開設することにした。一日70名以上の患者がきた。4月からは気功整体のチームに交代し、5月末で終了した。

弁当を配ろう

被災地の主婦にとって、もっとも大変なのは食事を作ることだった。水を取りに行って、開いているお店を探して買い物をして、カセットコンロで調理する。食器はほとんど割れて残ってい

毎日山積みの弁当がすぐになくなった

ない。台所や部屋の中は倒れた家具と中身で散乱しているのだ。３度も食事を作れば部屋の片づけなどなにもできない。だから、弁当が欲しいという声が大変多かった。

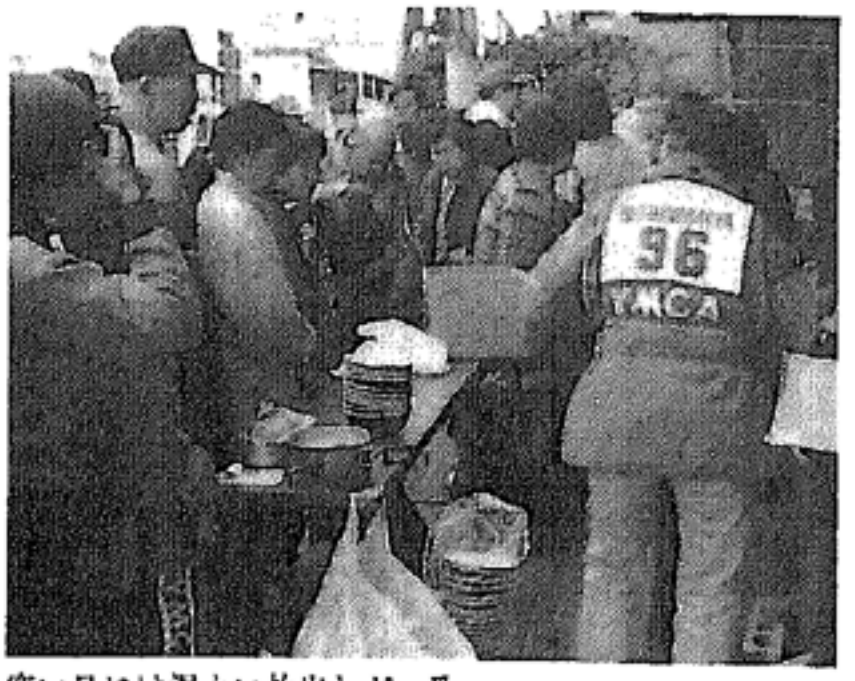
そんなとき、あるボランティアが市役所に山と積まれた弁当を発見する。その数４０００はあるという。山賊西宮ＹＭＣＡとしてはこれを見逃す手はない。調べてみると避難所に配った残りで、捨てるものだという。だったらすぐに貰えるだろうと思ったらそうはいかない。１個８００円もする弁当を予備校にただでやれるかということだ。「えーかげんにせーよ!!ほんなら捨てたとこ拾てこい!!。」ということで１日最大４０００個の弁当を配った。毎日夕方になると長蛇の列が出たのだが、西宮市の避難者は２００００人といわれてできた。なぜ４０００個だったのか後で解ったのだ。西宮市の場合各避難所にはボランティア団体いたが実際には１万６０００人しかいなかったのだ。しかし、全壊や半壊の自宅でがんばっている人には人が入っていたし、物資も食糧の配給もあった。何にもなかった、だからとりあえず避難所に登録している人が４０００人以上いたのだ。

炊き出しをしよう

２月にはいると、毎日冷たい弁当ばかりで体調を壊す人が続出した。そこで炊き出しをしようということになった。雑炊にうどんに味噌汁などが主なメニューだった。またこの頃になると各

避難所はボランティアと被災者が協力して炊き出しをするようになっていたので、外部からの申し出はすべて断っていた。断られた全国から来た炊き出し希望の団体が西宮ＹＭＣＡにおしよせた。なぜそんなに炊き出しがしたいのか不思議でしょうがなかった。

信州から来た、手打ちそばをしたい団体もどこに行っても断られてＹＭＣＡに来た。断られるのは当たり前でそばを茹でるのに3トンの水がいるのだ、水のでない状況の中でだ。「何考えてんねん!!。」と言った。しかし、寒い中での暖かい信州そばは被災者に人気抜群で2日で6000杯のそばがでた。感激の涙を流した人もたくさんいた。



寒い日には温かい炊出しが一番

ＹＭＣＡでは炊き出し希望の団体の調整をして埋まらない日をＹＭＣＡのボランティア・守口青年会議所・大阪長野ワイズメンズクラブ・大阪ＹＭＣＡ教職員組合で埋めることにした。暖かい炊き出しが口コミで広がってまた長蛇の列ができた。そしてまた近所からの苦情が来た。交通のじゃまになる、ゴミがでる、うるさい等々だ。一番残念だったのは、残ったものを容器ごと全壊した家にほりこんでいく被災者がいたことだ。「また雑炊か」という捨てぜりふをはいて毎日5杯ほど食べるばかやろーな中年男性もいた。炊き出しの大変さはその後始末にあった。近所を回って溝に捨てられた残飯の始末から苦情の処理など、炊き出しの団体が帰ってからが大変だったのだ。

子供たちの心のケアーにいこう

各避難所がボランティアによる物資・食糧の配給はあったが、大きな心の傷を負った子供たちの心のケアーがない。大阪府立大学講師倉石氏が避難所を回って心のケアーの必要性を説きＹＭＣＡのキャンプリーダーが中心となってゲームやスポーツの指導をし、倉石氏が心配のある子をピックアップしてカウンセリングをした。この活動も口コミで広がり10数カ所の小学校を訪問した。また、ＹＭＣＡの絵画教室の講師藤井まさ子氏のグループは絵画指導による心のケアーを5カ所で展開していった。

有名な西宮中央体育館のグランドで

新たな避難所の小学校から「子供と遊んでくれ」と電話が入るとリーダーが自転車に飛び乗っていくのだが、中に入れて貰えずに帰ってくることもしばしばあった。電話をしたのは被災者の母親たちで、追い返したのは校長先生だった。けがでもされたらとか、他の被災者にじゃまになるとか…ばかやろー!!だが分かるような気がする。私自身西宮ＹＭＣＡの施設長でもあるわけで、2歳・3歳児教室の子供たちをできるだけ早くＹＭＣＡで思いっきり遊ばせてやりたいと思う。校長もできるだけ早く授業を再開して、子供たちを運動場で走り回らせてやりたいと思うのが自然だ

と思う。また他のいくつかの避難所では、ボランティアの代表者に追い返された。「ここは俺たちの縄張りだ。入るんじゃない。」なんていう本物のばかやろー!!がごろごろいた。

被災地の子供たちニュージーランドに行く

第1団5月7日から16日、第2団5月12日から21日、第3団5月19日から28日の各9泊10日で、1団につき小中学生28名にYMCAのスタッフ1名カウンセラー1名インターネットボランティア1名の32名編成の3団、計96名がニュージーランドのワイヘケ島を訪問した。ニュージーランドの国会議員のTim Hubbard氏の発案で、心に大きな傷を負った被災地の子供たちをニュージーランドの大自然の中で心のケアーをしてもらおうというものだった。子供たちとボランティアは航空運賃を負担し、現地の費用は現地のボランティアや日本人会ほか各方面からの寄付でまかなわれた。5月の上旬にはTim氏が来日し細かな打ち合わせと西宮の馬場市長・東京に土井衆議院議長を表敬訪問した。大自然とのふれあいのほか、子供たちはホームステイや交流会、地元の小中学校の体験入学を楽しんだ。子供たちの精神状態はカウンセラーが毎日チェックし、その様子はインターネットを通じてリアルタイムの映像で西宮YMCAへと送られてきた。大成功を収めたプログラムだったが、第3団帰国後に現地の日本人会から抗議のFAXが送られてきた。内容は、子供たちが想像してたよりも裕福そうで参加費（航空運賃）を払っているというのは知らなかった。安い海外ツアーに利用されただけだ。裏切られた気持ちだというものだった。Tim氏や現地のボランティア団体とYMCAは十分な打ち合わせをしていたが、Tim氏と日本人会、Y

ＭＣＡと日本人会のコミュニケーションが出来てなかったのが原因だった。しかし、ボランティアとは悲惨な貧しい人たちに対する物質的奉仕だと言う考え方のなんと根強いことか。心のケアーなんてなかなか理解されないものだ。

10年ほど前、ニューヨークにあるフンッシュエアーファンドという奉仕団体を訪ねた。ニューヨークのスラム街の子供達を夏休みの間、中西部の農家に里親制度でホームステイさせている団体だ。最初のうちはトラブルが絶えなかったという。里親はスラムの子だから極貧のぼろぼろの格好をした子供達を想像していたら、ばりっとした自分たちより高級な服を着ている。自慢の大型テレビを見せたら、子供が家にはもっと大きいのがあると言ったとかで事務局に怒鳴り込んできたという。スラムの子供達にもプライドがあるし、その親達は子供に恥をかかせたくないからホームステイに出すときには血を売ってでも、売春をしてでも良い服を買って着せるのだという。10数年経ってやっと最近理解されてきたのだそうだ。

日本でもきっとこの震災を乗り越えた子供達が大人になって、自分たちの子供を持ったときに、震災の時に多くの人から寄せられた温かい心を、愛を思い出して心のケアーの大切さを広めてくれると思う。

ボランティアには金がかかる

日本では費用を1円でもとれば営利と見なされる。営利がいけないと言うのもおかしな話だが。震災前から社会教育団体のＹＭＣＡが公営の体育館を借りてバスケットボール教室でもしようと

申し込みに行くと窓口で、YMCAは費用を取るからとか、費用が高いからとか、営利だとかで断られるケースが多々あった。あんまり頭に来て「何ぬかしとんねん!!バスケットボールはYMCAが考案したスポーツやないか。日本に体育館を紹介したのもYMCAや。YMCAが特許料を請求したことが1度でもあるんか。それに文部省は、青少年団体は専門的知識技能を持った専任指導者を持つように指導しとるやないか。その人件費は天から降ってくるんか。」と言ってやった。そして、今回の救援ボランティアで全く同じことが起こった。

ボランティア団体を組織的に運営するには、専任の職員が必要だ。義援金は集まってもボランティア団体への支援金はなかなか集まらない。しかも、義援金はボランティア活動には使えなかった。たとえば遠方から義援金を送ってきて被災者に届けろ、ボランティアが使ってはいけないと言う。交通費やボランティアにかかる経費、食費・保険代等々の多額の費用はおまえがはらっておけというのだ。自分でとどけろばかやろー!!バックに大きな組織を持たない急造のボランティア団体が次々と倒れていった要因の一つも活動資金の枯渇が原因だった。

ボランティアの救援センター

2月に入るとボランティアが全国から西宮市に押し寄せてきた。しかし、各避難所にはすでに十分なボランティアが入っていた。市役所にあったNVNも新規のボランティアは断っていたため、大量のボランティア難民が生み出された。西宮YMCAはくるもの拒まずで受け入れたので、ボランティア救援センターと呼ばれた。1日最大500名以上のボランティアがきた。オリエン

テーションが出来る部屋がないので中庭に集めて階段の上から拡声器で怒鳴り続けた。

北海道から生徒５人と一緒にきた高校の女教師は、「どこに行っても断られてどうしようかと思いました。本当にありがとうございます。」と頭を下げた。かと思えば助けにきてやっているのに、もっとましな仕事させろとなどと文句ばかりを言うバカヤローも山ほどきて思いっきり足を引っ張ってくれた。

西宮ＹＭＣＡでは毎日朝の開始時と夕刻解散時にミーティングをした。そして、毎週日曜日には短い礼拝を持ち、ＰＴＳＤ（ポスト・トラウマ・ストレス・ディスオーダー）に関してとカウンセリングの基礎のトレーニングとをした。それでも、避難所に子供のレクリエーションに行った滋賀県の高校生は子供に自宅の電話番号を教えたところ毎日電話されてノイローゼ気味になってしまった。手首を切った女子中学生が血を流しながら夜中にボランティアを訪ねてくる。奈良からきていた女子大生は少し様子がおかしかった。落ち着きがなくボランティアの輪に入ろうとしなかった。しかし、１日おきに皆勤できて子供のレクリエーションの指導をした。ある日彼女の両親が私を訪ねてきていった。「娘は心身症で入院しなければならないほどだったのがボランティアに行くようになって調子が良くなってきた。しかし、もし変わったことがあればすぐに知らせて欲しい。」と言う。２月の最初は順調だったが末になって変調を起こした。同僚のボランティアの手を噛んだ。子供に平手打ちを食らわせた。ボランティアとカウンセラーとスタッフが集まって協議をした。最後

ボランティアのオリエンテーション

は私の決断だった。もうだめだと思った。明日彼女がきたらそのまま家に帰らせて親に連絡しよう。苦渋の決心だった。しかし、次の日彼女は来なかった。それっきりだった。

ある牧師さんの話を思い出した。「ある小さな教会の新任牧師であった頃、教会員が会りにも少ないため、夜に若者向けのバイブルクラスを作ったところ、若い女性に人気が出て多くの女性が集まってきた。そこへ一人の肢体不自由の青年が入ってきて熱心に話を聞くようになった。しかし、彼はいつもよだれをこぼしていたために、女性達が嫌がり、会衆の数が減り始めたので思い切って青年に来るのをやめてくれと言おうと決心したところ、青年がぴたりと来なくなり、また、会衆が増え始め、内心ほっとした。数ヶ月後、青年の父親が訪ねてきて私に言った。『先生本当にありがとうございました。息子は先生にいただいた聖書のプリントをしっかり抱いて天国に行きました。最後の最後まで先生に出会えて本当に幸せだった。これで天国に行けると申しておりました。』私はそれを聞いて愕然とした。そしてこんな未熟な差別的な私を通り越して神はその青年に愛を行ったことに気がついた。」この話が頭から離れない。神様はこんな滅茶苦茶な活動をしている私を通して誰かを救ってくれているのだろうか、ただただ信じて祈るしかないと思った。

芸能人もやってきた

2月の初旬と言えば、まだ被災者の生活も大変で芸能人がただで見れると言っても飛びつくような余裕はなかった。だから多くのボランティアに燃えた芸能人も多くの避難所で断られて難民

と化していた。そんな人たちが巡り巡って西宮ＹＭＣＡにやってきた。マネージャーは事情を知っているので「すみません。」と言い。本人はなにも知らずに「ご苦労さん。」と言った。あるＮＨＫのお兄さんお姉さんＯＢがきたとき、前の日から近所の避難所や家にチラシを撒いて、中庭いっぱいに椅子をおきステージを作った。開場の30分前になっても２．３人しか来ない。あまりに気の毒に思ってボランティアを総動員して避難所から子供を無理矢理さらってきて会場は超満員になった。さすがにプロでコンサートの終わり頃には子供たちは大喜びで、会場が割れんばかりの大合唱となった。誰もが浮かれたその瞬間近所から「やかましー!!」と抗議の電話が…ああしんどー!!

歌手のジェリー・Ｆさんは餅つきをしたいと言ってきた。３００キロの餅米を送ってきたので、前日から水に漬けておき当日の朝から蒸した。またしても避難所から子供たちをさらって来て会場を埋めた。今度はあったかい餅が食えるという餌でつった。餅つきは順調にいって子供たちも餅に大満足していた。しかし１００キロついたところでみなさんリタイヤ。結局蒸した餅米２００キロを残して帰った。あわてて近所のお母さんを集めて夜通しついてこねて翌朝避難所を回って配った。それだけでなく残飯・きなこに砂糖紙皿に割り箸は延々と散乱しその後始末にまる１日かかった。しかし、ジェリーさんは恨めない。倒れるまで一生懸命餅をついてくれたのだから。それより頭に来たのは新聞に「ＸＸＸ避難所に西田ひかる来たる!!」と言うのを見たときだった。西田ひかるを受け入れるんだったらジェリー・Ｆを断るなー!!それより西田ひかるもＹＭＣＡに来てくれ!。

三角マークのＹＭＣＡの引っ越し屋さん

全半壊の家から荷物を運び出すためにはユンボーで解体しながら運び出す必要がある。全壊家屋は市が費用を払ってくれるが長い間順番を待たなければならない。その間にドロボーに盗掘されてしまう。その後放火された例も何件もある。だから余裕のある人は自分で立て替えて解体するのだ。ＹＭＣＡにこの荷物の運び出しの依頼がひっきりなしに来た。いわば財産の掘り出しだ。

ＹＭＣＡの近所に2階建ての木造アパートがあったが見事にぺちゃんこになった。1階に住んでいて、奇跡的に救出された一人暮らしの車椅子の40前後の女性から依頼があった。財布一つすら持ち出せず、無一文だという。作業は屋根から掘り出し2階部分をのけてやっと1階の部屋であったろうと思われる場所にたどり着いた。丸1日探してミンクのコート1枚と指輪が2個しか掘り出せなかった。それでも彼女はミンクのコートを抱きしめて号泣した。何度も何度も「ありがとう」と言った。ミンクのコート1枚と2個の指輪が彼女の全財産になってしまった。

被災した家屋から家財道具を運び出す
YMCA引越手伝い隊

仮設住宅への引っ越し、避難所からの引っ越しが延々続いた。この間羊羹の「とらや」が車を持ち込んで4人づつ1週間交代で引っ越し専門に活動してくれたので、コンスタントに要望に応えることが出来た。「とらや」チームの交代時には別れの寂しさもあったが新しいチームの持ってくる羊羹も大変魅力だった。また、徳島の松村農園も車を持ち込んで2人組で1週間交代で働いてくれた。社長や夫人の専務まで全社員が1度は来たのだと思う。全く頭がドがる。

ドロボーさんもやってきた

1月17日大震災の当日にはすでに全国各地のナンバーを着けた車が被災地を走っていた。救援隊やボランティアだけではなくドロボーや強盗団もどんどん入ってきた。三宮のセンター街やデパート、商社などのビルには不自然な穴があいている。解体工事や震災であいたのではなくドロボーが重機で開けたものだ。避難勧告が出ると住民はどんどん出ていき、入れ替わりにドロボーはどんどん入っていったのだ。襲撃されたコンビニエンスストアーも沢山あったし、こじ開けられた自販機も山とあった。ロサンゼルスの暴動とあまり変わらない。西宮ＹＭＣＡの救援センターでも盗難が相次いだ。荷物を置いた一瞬にやられた。報道されないがこれが日本の現状なのだ。地震予知も避難勧告も良いがその後の警備の体制を確立しないと避難しない人が続出するだろう。

マスコミに一言言いたい

マスコミにはひどい目にあった。週間Ｇという雑誌がボランティアの座談会をするので市役所までできてくれという。市役所の地下でＮＶＮ・関学の代表者が集まって座談会が行われた。雑誌社の思惑は行政の批判をさせたかったのだろうが、市役所の地下で行政の批判を大声でするほど馬鹿じゃないので一般的な苦労話で終わった。雑誌が発売されて読んでみると私が行政の批判を思い切りしてる。もっと驚いたのは座談会のメンバーが当日と全く違った。見たことも聞いたこともない人々に変わっていたのだ。ここまでやられると怒りよりもなるほど週刊誌はこうやって作るのかと感心してしまった。Ｎ・トレンディーの取材は大変好感の持てる記者とカメラマンがきた。記事にして現状を伝えたいという情熱が伝わってきた。取材が終わってカメラマンが現場の写真を撮りたいという。倒壊家屋から荷物を運び出している現場を撮りたいというので、ＹＭＣＡの隣の全壊家屋にボランティアを総動員して無断で荷物を運び出した。撮影が終わってまたそのまま元に戻した。これがやらせか!!と感動してしまった。次の日その家の主人がきて荷物を運び出してほしいという。「昨日出したのに」と思わず叫んでばれてしまった。もう一回荷物を運び出して、結果的にはやらせでなくなってしまった。

ＮＨＫの週間ボランティアの取材はやらせはなしだったが、ボランティアのミーティングを撮影中に私が冗談を連発するとカメラマンがカメラを回しながら笑いこけてしまった。だめだこれ

はと思っていたら予定通り西宮ＹＭＣＡの働きとかのタイトルで放映があった。喜んで観ていると西宮ＹＭＣＡがでたのは建物だけで、中身は全部西神戸ＹＭＣＡのものだった。結果的にやっぱりやらせになった。後でＮＨＫの記者から「西宮ＹＭＣＡは面白すぎてＮＨＫには向いてません。」といわれた。救援活動が明るかったらいかんのか!!。

朝日放送ラジオはお昼の生番組で西宮ＹＭＣＡの高齢者を訪ねて話し相手になるプログラムに同行取材したいという。インタビュアーは松福亭鶴瓶の弟子だそうだ。全くふざけた企画だ。その日訪問予定のＩさんに電話してＯＫをもらい若い3人の女性のボランティアと取材チームを送り出した。Ｉさんは89歳の足が少し不自由だが元気なおじいちゃんで、大変Ｈで女性のしかも若いボランティアでないとイヤだとだだをこねた。いつも行くなり放送禁止用語を連発する。連発しだしたら止まらない。西宮ＹＭＣＡではラジオの前に人だかりが出来ていた。生放送だし落語家だし放送禁止用語の連発で朝日放送も今日までかと耳をダンボにしていた。いよいよインタビューが始まった。「おじいちゃん若いきれいなボランティアの女の人に囲まれてよろしいなー。」みんなが期待した瞬間、「私はＹＭＣＡに命を救われました。本当は自殺しようとおもっとんじゃ。」ラジオの前ではボランティアが全員ずっこけた。そして電話がひっきりなしになった。「感動した。」「私もボランティアをしたい。」「うちにもボランティアに訪問してほしい。」「がんばってください。」等々。…悪いことはしてみるもんだ。

なぜマスコミに出ないのかという事件も山とある。避難所のＨ高校の校長が避難者からひどい暴行を受けているとか、避難所の体育館でシンナー少年が大量に捕まったとか、強盗団が全国からきたとか捕まった連中は半殺しにされているとか、解体・復旧作業で多くの作業員が事故死している等々絶対にニュースにならなかった。行政はいつも悪者で被災者は常に哀れで、しかもが

んばっていなくてはニュースにならないのだ。

最後は「オウム」報道だ。オウム報道以来、一般のボランティアがほとんど来なくなった。最大５００名のボランティアが来ていた西宮ＹＭＣＡは、５名ほどになってしまった。

他のボランティア団体も同じような状況に陥って、小さなグループは解散していった。今の日本はマスコミ次第でどうにでもなってしまう。そんな恐怖を感じた。

インターネットがやってきた

関東大震災のＹＭＣＡの救援活動記録を見ていると、我々のやったことは全て72年前に行われていた。唯一新しいことと言えば、インターネットによる情報活動だけだと思う。西宮ＹＭＣＡにインターネットがやってきたのは、１月の末、大阪ＹＭＣＡの笹江君から「ＷＮＮ（ワールドＮＧＯネットワーク）でインターネットのホームページを開いて情報を発信する事になりました。ついては、最前線の西宮ＹＭＣＡにマックを１台おいて…」などと訳のわからんことを言いに来た。救援活動でごった返しているときだったので「かまへん、ＯＫ、何でもやって！」が始まりだった。

大阪大学の水野助教授、下條助教授をはじめＷＮＮの通信ボランティアが西宮ＹＭＣＡに詰めて準備し、２月のはじめから通信が始まった。西宮ＹＭＣＡでの救援活動の様子を画像も入れて発信した。子供達の心のケアープログラム、ニュージーランド訪問を西宮ＹＭＣＡのスタッフと

ＷＮＮのボランティアが協力して計画・引率してから急速に協力体制が強化され活動が充実していった。

またインターネットから多くの情報を得ることが出来た。オクラホマの爆弾テロでは翌日には現況とボランティアの申込先、義援金の送り先が載っていた。また、サハリン地震ではインターネットでＡＭＤＡのチャーター機が、翌日に岡山空港から出ることを知り夜中にテント、毛布、ポリタンク、防寒具、下着、食料などをハイエース２台に積み込み送り出した。そして、岡山ＹＭＣＡの太田君に連絡して飛行機への積み込みを手伝ってもらった。太田君によれば、それ以降岡山に本部を置くＡＭＤＡの協力関係が出来ていったという。インターネットを通して救援活動の輪が広がっていった。また、世界中に瞬時に現実を伝え、また情報を得ることができる。マスコミに痛い目に会っていた我々にとって大きな武器となった。

電化製品の修理ボランティアだけは絶対やめよう

２月の中旬に天理のボランティアの父娘がやってきた。電気製品の修理のボランティアをしたいということだった。来る者拒まずの西宮ＹＭＣＡだからもちろんＯＫした。数日経つといきなり主要新聞に「電化製品の修理ボランティアします西宮ＹＭＣＡ」と出ていた。電話が１００件以上鳴り響き業務が止まってしまった。まずいと思ったが後の祭りだった。壊れた電気製品が２００個以上持ち込まれて教室を埋め尽くした。１人でこつこつ直すのだからただでさえ気が遠くなるほど時間がかかるのに、震災で壊れたような物は壊れ方がひどいし、古い物は部品がない。

結局直らない物が大半なのだ。しかも部品代というのは驚くほど高い。部品代が高いとまたYMCAにクレームが入る。直っていないとか品物をなくされたとか、ありとあらゆるクレームが舞い込んでくる。しかも、素人には全く手が出せない。後でわかったことだが親子は無職で夜は道路工事の警備員をしていたそうだ。部品代を立て替える余裕もなかったのだ。6月に入ってすべての電化製品を天理に持ち帰って直して直接被災者に送ってもらうことになった。YMCAの手を放れて1件落着と思ったが、ひっきりなしにクレームの電話は続く。やっと父親に連絡が取れて問いただすと娘が全財産を持って家出したとかで部品も買えず修理もできていないとのことだった。西宮からトラックを出して天理からすべての電化製品を持ち帰って大きな電気専門店に修理に出すことにした。依頼者は口をそろえてYMCAが修理代を持てと言う。この電気修理に振り回されたエネルギーと費用を仮設住宅で孤独と戦うおじいさんやおばあさんに使えなかったことが本当に残念だった。電化製品のボランティアは決して誰のためにもならない!!絶対にやめよう!!

サニーボランティアハウスが出来た

西宮YMCAの本館は自前の建物だが予備校の別館は賃借ビルだ。その隣地にはビルのオーナー土井荘太郎さん所有の大きな土蔵があった。この震災で見事に全壊してしまった。土井氏の依頼で中に入っていた物を掘り出した。土井さん自身、中に何が入っていたか定かでないと言う。掘り出してみるとヤクの毛皮、アルバム、賞状などが出てきた。連絡すると東京から土井さんが飛んできた。無傷で出てきた物を見て感激された。ヤクの毛皮はチベットの高僧にもらった物だ

という。そして、ＹＭＣＡの救援活動を見てもう一度感激してくれてボランティアの宿泊施設建築のために半年間土地を提供してくれることになった。

１階建ての食堂事務所シャワー室集会所が１棟と２階建ての宿泊棟が１棟、計２棟の建物は、相馬雪香さんが理事長の社会福祉法人さぽうと21が提供してくれることになった。さぽうと21は難民を助ける会と表裏一体の会でもあり、２月から、東京から理事の柳瀬房子さんや林桂子さん（ご主人が東京ＹＭＣＡの評議員）をはじめとする相談員の方々が、西宮ＹＭＣＡで被災した留学生に面接して相談にのり、サニー基金で資金援助をしていた。常務理事の吹浦忠正さんは古くからのＹＭＣＡの理解者で、元大阪ＹＭＣＡ副総主事、酒井哲雄さん（頌栄短期大学学長）とも旧知の仲であった。その酒井さんは地主の土井荘太郎さんの幼なじみで、私の父、山口光朔の親友で私の仲人でもある。大変複雑な関係のおかげで大変簡単に話が進んだ。さぽうと21のシンボルマーク、ウサギのサニーちゃんからとってサニーハウスと名付けられた。責任者として日本ＹＭＣＡ同盟の世戸俊男主任主事がやってきた。西宮ＹＭＣＡからは石坂安・上貝まどかの２名が専任で運営に当たった。３月１日のオープンから８月31日まで延べ約６０００名のボランティアが全国から・世界からＹＭＣＡを通してやってきた。日中は西宮ＹＭＣＡと西神戸のＹＭＣＡに分かれて活動し、夜はレクチャーをした。

日曜の朝の礼拝の一時　奨励中の筆者

韓国のＹＭＣＡからボランティアのグループが入ったときに講義をした。いつものように最後に72年前の関東大震災の際のＹＭＣＡの先達の働きを紹介して、今回の我々の働きがまだまだ及ばないことを謙遜も含めて話している途中に突然涙が込み上げてきた。阪神大震災の死者約５５００人。それとほぼ同数の韓国朝鮮人の人たちを日本人は関東大震災で虐殺したことが頭をよぎったからだ。しかも、言葉の通じない韓国のグループを迷惑に思っていた。第２次世界大戦時に残虐行為をされた日本人のために何かをしたいと来てくれたボランティアにたいしてだ。忘れていたでは済まされない。要求ばかりで責任を果たしていない。私は被災者で、ボランティア団体の代表で、避難所の代表者として救援活動をしてきた。そして、被爆二世として（父が広島で被爆）活動してきた。しかしそれらの活動は全て被害者の立場での要求や抗議ばかりだった。都合の良いときだけ弱者の立場に立っていた。その前に過去に様々な残虐行為をした日本人の一人であることを思い知らされた。

８月15日の終戦記念日には活動に当たり、我々の活動を支えてくれた、西宮ルーテル教会の市原牧師を招いて、ボランティア全員で祈祷のひとときを持った。

大活躍の出家ボランティア

西宮ＹＭＣＡでもオウム事件以降一般のボランティアが激減し、救援活動が窮地に追い込まれた。危機を救ったのはサニーハウスに１週間単位で滞在した全国から来たＹＭＣＡのボランティアと、１ヶ月以上長期のボランティア連中だった。彼らは決してサニーハウスに泊まろうとせず、

西宮ＹＭＣＡの教室や倉庫に泊まり込んでいた。自らを出家ボランティアと呼んだ。20人足らずだったが、５００人以上の仕事をした。一騎当千の猛者たちだった。

初代チーフの矢沢君は自宅は西宮市で関東の大学生だった。家族が心配で自慢の１０００ccのバイクでとんで帰ってきたそうだ。４月の授業開始とともに帰っていったが関東で洗礼を受けてクリスチャンとなった。同じくバイクでやって来た、モト（木村君）は東京に帰って洗礼をうけて神学校にはいった。ＹＭＣＡのスタッフにも常日頃から受洗を勧めるのだがなかなか決心しない。ボランティア活動にはやはりキリスト教への強力な吸引力があるのだ。七里くんは救援活動の体験を活かしたいと海外青年協力隊に応募しラオスに行くことになった。とみさん（松田）は元ＹＭＣＡのスタッフで新婚の旦那さんを名古屋に置いて炊き出しの下働きを徹底的にしてくれた。

最後まで残ったボランティア

２代目チーフの神林君は１月末にやってきた。私の頼もしい右腕としてがんばってくれた。芦屋在住の尼崎の大学の学生で西宮ＹＭＣＡ予備校の出身者だ。震災で親友が亡くなって何かしたいとＹＭＣＡに戻ってきた。２人は館長室に寝ていた。トール（高橋君）、モンチ（小西君）、アユミ（横田さん）の３人組は東京ＹＭＣＡの英語専門学校の出身者で、３月に卒業式に東京に帰ったがとんぼ返りで帰ってきて最後まで頑張った。

特にトールは学校始まって以来の悪で要注意人物だそうだ。東京から原付バイクで帰ってきた。

本当にメチャな可愛い奴だ。モンチはモンチッチそっくりだからモンチだが本人は長渕剛だと思っている。福祉の高齢者の訪問を一手に仕切ってくれた。アユミちゃんは事務局で被災者からのクレームをすべて受け止めた。1日1度は泣いていた。広沢えりさんは福岡の大学生心理学の専攻だ。机の上でない生きた勉強をたっぷりしたことだろう。これからの研究に活かしてもらいたい。きよのさん（森山）は奈良のケースワーカーで特に障害児が専門だった。彼女の手腕に幾度も救われた。旦那さんより足が大きいことが自慢だそうだ。まきちゃん（小平さん）は東京のイベント大好き女子大生でイベントと言えばとんで帰ってきて大活躍をしてくれた。おっちゃん（小原さん）は事故で足が不自由だったが毎日皆勤で炊き出しを仕切ってくれた。ボランティアのお目付役的な存在だった。中村君はなんとサラリーマンで西宮ＹＭＣＡから通勤していた。仮設住宅の段差解消のために全国の学校・子供会などに呼びかけて木箱を作ってもらって仮設住宅に配った。のりリーダー（倉田君）は3月に関東の大学を卒業して西宮ＹＭＣＡに来た。彼は進んで雑用に徹した。掃除・洗濯・ゴミだしみんながいやがることを進んでしてくれた。しったん（志谷君）は広島ＹＭＣＡの介護福祉専門学校を卒業してやってきた。レクリエーションの責任者とし袋叩きに会いながらもくじけずがんばってくれた。ミオ（池田君）は横浜ＹＭＣＡの専門学校を卒業してきた。電気修理の後始末を一生懸命にしてくれた。マスター（田中君）は奈良の予備校生で料理が得意で名コックだ。金沢君は2月に

人気をはくしたさんぱつサービス
専門技能を生かした活動も各地で展開された

横浜から来た高校3年生、卒業して最後にまた戻ってきた。
途中で帰ったボランティアのみなさんにも心からありがとうを言いたい。

ボランティアってなに

ボランティア実習で校長と先生がもめていたある女子高校に「ボランティアとは何か」で講演を頼まれた。西宮ＹＭＣＡに集まったボランティアの中には企業から派遣されてきた社員、学校の実習できた大学生、先生が授業として引率してきた専門学校・小中高校のクラスなどもあった。そこでよく問題になったのが彼らはボランティアかということであった。

文部省はボランティア活動を生涯学習の一環としてとらえ、その4つの要素として自主性・公益性・無償制・先駆性を揚げている。しかし、文部省の生涯教育審議会でも「ボランティア活動の推進」を巡ってボランティア活動は行政が推進するものか、でもめて最終的には「ボランティア活動の支援・推進」に落ち着いた。それほど日本人にとって難解なものだ。日本人に難解な理由として日本国際文化研究センター千田稔教授は4月20日の朝日新聞夕刊で「「義」の国で「愛」実践の難しさ」と題して寄稿していた。そのなかで儒教的義理人情の日本社会での無差別のキリスト教の愛＝（ボランティア）の実践の難しさをといている。だからボランティアは日本語に訳せないのだと言う。

悲劇的な急造ボランティアと迷惑な専門家

ある避難所にボランティアが集まってきて、ある八百屋の親父が代表となって避難所を仕切った。強引など根性論で震災直後の2週間の混乱期を乗り切った。状況も落ち着いてきた4月のはじめに大変な悲劇が起こった。東京からきていた女子大生が帰りたいと言ったら監禁されて暴力を振るわれ代表者は逮捕された。自然発生的に生まれたボランティアグループの声が大きかったために、リーダーになってしまった八百屋の親父の悲劇だ。こんな悲劇的な避難所が山とあったことは、あまり知られていない。ボランティアというものを理解できなかった1つの例だ。

しかし、ボランティアが日本語に直せないとしたら、儒教的義理人情社会で育ってきた高齢者の心のケアーが英文和訳のテキストと技法で出来るのかという疑問がわいてくる。ある避難所ではボランティアのほとんどがケースワーカーで、自立だ自助だ自己決定だと判で押したようなカウンセリングしかしない。励ましはしない、炊き出しもしないので被災者は元気が出ない。元気がないからとカウンセリングをする。本末転倒の迷惑な専門家だらけの避難所もあった。西宮YMCAにはソーシャルワーカーや心理療法士・臨床心理士などの専門家も続々やってきた。彼らは一ボランティアとして、特に子供のレクリエーションや高齢者の訪問・話し相手などに関わって大きな成果を上げた。しかしYMCAにも迷惑な専門家がきた。それこそ英文和訳のテキスト通りにしなければ気が済まない輩で、特にYMCA関係者の専門家ほどたちが悪い。やれ、なに

なにが間違っているの。なになにが悪いの。たまにお客で来てあちこちで批判をしまくる。心からバカヤロー!!と申し上げたい。

善きサマリア人こそYMCAの名誉ボランティア

私はボランティアとは聖書のルカによる福音書の「善きサマリア人」の行動こそがボランティア活動だと信じている。

「ある人がエルサレムからエリコへ下っていく途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下ってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通っていった。同じように、レビ人もその場所にやってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通っていった。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばにくると、その人を見てあわれに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れていって介抱をした。そして翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

この箇所に救援活動のそしてボランティアのすべてがあると私は解釈している。あくまで私の解釈だが、まず、祭司とレビ人がなぜ道の向こう側を通っていったか。レビ人と祭司は勤勉実直

の代表であった。その彼らがなぜわざわざ道の向こう側を通っていったのか。当時の律法には死体に触れてはならないという厳しいきまりがあった。だから、死体と思われる者から規則通りにできるだけ離れて歩いた。本当に真面目な人たちだったわけだ。社会的にも全く常識的な行動であったわけだ。ところがサマリア人は当時差別を受けていた人たちで、律法やきまりなど気にせず近寄ってきた。つまり何とも不真面目な非常識な行為であったわけだ。西宮ＹＭＣＡが山賊と呼ばれたり、非常識軍団と呼ばれる度に私は善きサマリア人になったような最高の喜びを感じていた。

サマリア人はけが人に油とぶどう酒と包帯を持っていた。またそれを使うスキル・技能を持っていた。救援活動には物資と道具と技術が必要だ。いつでも緊急援助の出来るネットワークと情報網が必要だ。西宮ＹＭＣＡには世界中のＹＭＣＡのネットワークがそして青年会議所・ロータリークラブなどの国際奉仕団体・ＮＶＮ（西宮ボランティアネットワーク）・ＷＮＮ（ワールドＮＧＯネットワーク）その他様々な個人・団体の支援と物資補給の道があった。そして、ＹＭＣＡには１５０年のボランティア経験で培われたディレクターシップがあった。マスコミが必ずした質問は「ＹＭＣＡさんはいつからボランティア活動を始めましたか。」だった。私は必ず。「１５０年前から」と答えた。そして72年前の関東大震災での救援活動の経験があった。ボランティアをオーガナイズするスキルとしてのディレクターシップがあった。ＹＭＣＡの生まれついてのボランティアリズムと多くの多方面の専門技術を持った専門家の協力。そして、多くのスポンサーからの支援の道が震災前からすでに出来ていた。”油とぶどう酒と包帯を”常に持っていたのだ。備えよ常にだ。

サマリア人は資金を持っていた。”デナリオン銀貨2枚を取り出した”ボランティア団体には

資金が必要だ。義援金は集まってもボランティアの活動資金はなかなか集まらない。ましてやＹＭＣＡの復興資金となるとなおさらだ。泣き言を言ってもしょうがない。〝費用がもっとかかったら、帰りがけに払います〟この自信と手腕を持ちたいものだ。帰りまでにそれぐらいは稼いでこようと言うのだ。強烈な経営能力とファイティングスピリットではないか。ＹＭＣＡのスタッフに今もっとも求められる資質だと思う。

サマリア人はろばにのっていた。救援には輸送手段が必要だ。1月の終わりだったか朝日新聞厚生文化事業団の益田君が西宮ＹＭＣＡに来た。「兵庫県庁に2億円もっていくんです。山口さんとこも何かいりますか。」と聞く。「車くれ。輸送用の軽トラックや。」「まかせてください。」と胸を張って帰っていった。2、3日たった頃朝日新聞に〝軽トラック求める。西宮ＹＭＣＡ〟とでかでかと出た。「益田のヤロー。何という奴だ。」とみんなで笑ったが、なんと全国から5台の軽トラックが集まって給水に、物資配達に、引っ越しに、弁当運搬にと大活躍をした。現代のロバの意味するものはその行動力だ、地域に飛び出して一人でも多くの傷つきうずくまった人を発見し、その隣人となることだ。救援活動だけでなく、日常の事業活動でも同じだ。叩けよさらば開けられんだ。

なぜサマリア人は当時の厳しい法律を犯してまでけが人を助けたのか。〝あわれに思った〟からである。しかし原書では「内臓が震えた。」となっていると言う。沖縄の友人に沖縄では気の毒とかかわいそうという言葉はない。きむぐるし、肝が苦しいというと聞いた。何とも深みのある言葉だ。まさに内臓が震えて、はらわたが煮えくり返って、苦しくて、いてもたってもいられなかったのだ。ある人によればボランティアとは怒りの共有だという。考えて見れば、小学4年生の男の子が高校生に殴られ、怪我をして泣いているのを見たとき、誰でもかわいそうに思うだ

ろう。しかし、それが我が子であればかわいそうにと思うだろうか、私ならはらわたが煮えくり返って飛んでいく。"かわいそう"は所詮他人事で強者から弱者へ、上から下への同情に他ならない。西宮YMCAの救援活動は内臓の震え、はらわたの煮えくり返り、つまりバカヤロー!!と思ったときに行動するのだ。

"律法の専門家"にイエスは律法を守ることと人の命を救うことのどちらがよいことかと問うたのだ。そして、専門家は命を助けることだと認めざるを得なかった。単純な話だが専門家だからこそ理解するのが難しい。

プリンストン大学の神学部の大学院で「善きサマリア人のたとえ」の研究をしている大学院生に「善きサマリア人のたとえ」をテーマにした論文を教室から教授の部屋まで至急持ってこなければ単位が取れないと言う課題を与えた。その通り道に学生を一人苦しそうにうずくまらせておいた。40名の学生の中で病人に声をかけたのはたったの5人でしかも、あまりにあわてて病人につまづいた学生もいたという。頭の中で、理論で解っていても、心が内臓が震えなければ行動に結びつかない。また、パウロは「預言する力や奥義や知識、山を動かすほどの信仰があっても、全財産を投げ出しても、命を差し出しても愛がなければ全ては無に等しい。」と言っている。つまり私はボランティアであるかないかは強制だとか実習だとかの形式ではなく、そこに愛があったか、心が内臓が震えて、いてもたってもたまらずに行動したかどうかによって決まると思う。

イエスが"行ってあなたも同じようにしなさい。"と専門家に言ったように、まず考えるのではなく、すぐにその人の隣まで行かなければならない。そして、内臓が震えたとき、いてもたってもいられなくなったときに手をさしのべる。「走りながら考える」ことこそ行政には決して出来ない、YMCAにしか出来ないことだと思う。

法律にきまりや規則・常識・やり方・方法・形式に事例に前例、いわゆる「義」にがんじがらめな行政と「愛」の"はらわたの煮えくり返りとバカヤロー"で行動する西宮ＹＭＣＡが幾度も衝突したのは当然の帰結だったのだ。全く同じ様な経験を大阪ＳＹＭＣＡにいたときにした。１９８１年の国際障害者年にあたり障害者の文化活動の発表の場として「障害者作品展」を計画した。政治的な対立や幾多の困難を乗り越えて市内の全ての障害者団体、学校が参加していざ実施という時に、会場の市立博物館から教育委員会と共催でないと貸せないと言ってきた。教育委員会は社会福祉協議会の共催がいると言い、社協はＳ市の共催がいると言い、Ｓ市は博物館の使用許可書がいると言った。堂々巡りであまりにもらちがあかず、馬鹿馬鹿しくなったので、このうちの一つに行って口頭で「他はみんな許可が出ました。残るはそちらだけです。」と言ってやったら、慌てて許可を出した。それを持って他の３つを回ったらとんとんと話が進み無事に実施できた。そして、この運動は全国に広がっていった。もっとも驚いたのは市長を始め４つの代表が開会式のテープカットで我先にとはさみを持って立っていたことと、次の都市のＳ市の市政要覧の１ページに市の誇る事業としてでかでかと載っていたことだ。そして10年以上たった今でも「障害者作品展」は続いている。

４月のはじめに西宮市の馬場市長から呼び出された。また何か悪いことしたかいなと行ってみると大きな感謝状の盾をもらった。西宮市が公式に出した数枚のうちの１枚だそうだ。山賊に感謝かと笑ったがＹＭＣＡに帰って気がついた。これは勝利の盾だ。律法主義者に勝った「愛」のボランティアの勝利のしるしだ。

さよならYMCA

全壊した実家の学校法人オリンピア幼稚園は新神戸駅のすぐ南側にあった。神戸YMCAから歩いて5分のところだ。30名の園児がいた。理事長・園長の母と話し合った。幼稚園を再建するには最低認可人数の150名分の教室を建てなければならなかった。金く不可能なことだ。学校法人の解散に追い込まれてしまった。オリンピア幼稚園は1950年に建てられた。オリンピアという名前は日本聖公会総裁主教であった祖父、八代斌助と親友であったアメリカ・オリンピア教区のベイン主教との友情の印としてつけられた。45年の歴史の中で大きな事故で子供を傷つけることは1度もなかった。それが母の自慢だった。大震災で一人の園児が亡くなった。自宅で家具の下敷きになった。45年間守り続けた幼稚園がなくなる。そして園児が天国に召された。そして、自宅が全壊した。全壊した家には2年前になくなった父、山口光朔の遺品が、大切な思い出の品があった。解体時に取り出そうと私を呼んだ。救援活動でいけなかった。結局殆ど失ってしまった。幼稚園も園児も家も財産も夫の遺品も失った。「うちの息子は、他人は助けても自分の母親は助けない。」と会う人ごとにぼやいた。おかげでおしかりの電話をいやというほどいただいた。しかし母は幸せだった。ぼやける人が沢山いる。息子をしかってくれる（お節介で迷惑な？）人がいる。母を心配して大事に思ってくれる人がたくさんいるのだから。この世の宝はなくなっても、天に宝が山と積まれていると私は信じている。

そこに神戸市と特別養護老人ホームを跡地に作る話が持ち上がった。神戸市は老人福祉では政令指定都市の中でもっとも遅れていると言われていた。そしてこの大震災で多くの高齢者が路頭に投げ出された。もし実現できれば、何よりも、被災したお年寄りに手をさしのべることが出来る。大震災後の開所第一号になる。神戸市初めての中層建築（6階建て）の特養になる。神戸市で初めての市街地のど真ん中の施設になる。日本で初めて幼稚園が特別養護老人ホームになると言う歴史的な快挙となる。初めてづくしの計画だ。

社会福祉法人「光朔会」、特別養護老人ホーム「オリンピア」と命名した。「光朔会」は聖書の”はじめに光りあり”と言う意味で父の名から取った。「オリンピア」は祖父、八代斌助が名づけたオリンピア幼稚園から取った。父と祖父にまつわるこの2つの名前を、すべてを失った母に残してやることもできる。しかし、その実現は限りなく困難だ。建築資金がない、学校法人から社会福祉法人への変換は出来ない。文部省と厚生省の調整がつかない。現状の縦割り行政下では絶対に不可能だという人もいる。あまりに大きな困難が私を決心させた。「バカヤロー!!やったろやないかー!!」西宮ＹＭＣＡ救援本部の終了とともに、21年間お世話になったＹＭＣＡを去っていく。

ＹＭＣＡ在職中にお世話になった全ての皆さんにお礼を申し上げたい。そして、ＹＭＣＡの救援活動を受け入れてくれた被災者の皆さんと救援活動に参加してくれたボランティアの皆さん、ご協力ご支援ご理解を賜った全ての方々に心からお礼を申し上げたい。

西宮YMCA　地域救援活動状況

（1995年8月末日現在）

ボランティア受け入れ養成活動

1.ボランティアの受け入れ（1/17ー継続中）
全国YMCA東救援本部ボランティアセンターとして、全国YMCA及び一般のボランティアの受け入れ（最大平日200名・土日400名・現在50～100名のべ約2万人）宿泊施設サニーボランティアハウス（最大70名収容）の開設（3/21～継続中）
国内ー全国YMCA、企業、労働組合、大学、高校、中学、小学校、教育委員会、青少年団体、社会福祉協議会、大学生協、教会、青年会議所、ロータリークラブ、ローターアクトクラブ、ワイズメンズクラブ、など
海外ーアメリカ・イギリス・フランス・タイ・台湾・韓国・などのYMCA関係、キリスト教関係、留学生など

2.震災ボランティアのための養成講座（1/20～8/31）
対象：震災ボランティア50名～70名
日時：毎週月～木曜19時00分～21時
毎週日曜10時30分～12時
会場：西宮YMCA

緊急援助活動

3.無認可の避難所として被災者の受け入れ（1/17～3/31）
15家族50名を教育棟6教室で受け入れ。

4.救援物資配布（1/17～4/31）
世界・全国YMCA。ワイズメンズクラブ・日本JC・郵パック、また北アメリカカリフォルニア日本文化コミュニティセンターなど、海外の市民団体から送られてきた救援物資最大1日20トンを1000名～2000名に西宮YMCAで配布。

5.給水活動（1/17～3/5）
阿南市5ヶ・東京江東区1ヶのタンクを借用。最大1日10000リッターを西宮YMCA他5ヵ所で給水。

6.炊き出しの実施・弁当の配布（1/17～4/15）
1）炊き出し－西宮YMCA・香櫨園小学校・夙川市民館など（1/18～4/15）
（1回最大3000食）
2）弁当の配布－西宮YMCA（1/17～4/5）
（1日最大4000個）

治療・診療活動

7.臨時診療所の開設（1/20～3/31）
（朝日生命・明治生命・大同生命各医師団）－毎日（約30名）
（川崎医大OB医師団）－毎日曜日（約40名）

8.鍼灸診療所の開設（1/25～4/30）
坂下式鍼灸師5名水・土10時～4時1日約70名

9.気功整体診療所開設（3/1～5/31）
対象：被災地の幼児から高齢者まで1日10名
日時：毎週月・火・金12時～6時まで
場所：西宮サニーボランティアハウス

情報収集・発信活動

10.被災地の情報収集・リサーチプログラム（1/20～継続中）
2～3人一組で地域をまわり特に高齢者・障害者に対する救援活動・物資配布情報収集活動を展開。1日50名～200名を訪問。
日時：毎日10時～4時30分
場所：西宮市・芦屋市・東灘区（避難所・仮設住宅・独居高齢者宅など）
内容：ニーズの掘り起こし・情報の収集

11.生活情報受信発信活動（1/20～継続中）
チラシ作成配布・掲示板に掲示・インターネット接続（WNH＝ワールドNGOネットワーク）震災地から世界へ情報発信活動・NHKボランティアネットワークに接続FM大阪「文字の出るラジオ」に接続震災ニュースの提供・大型ディスプレイ（日本で1台）の設置

心のケアープログラム

12.避難所の子供たちのレクリエーションプログラム（1/20～継続中）
日時：毎日午後2時から4時30分
対象：幼児から中学生まで1ヵ所約20名計約100名
指導者数：1ヵ所6（10）名×5（15）ヵ所＝計25（150）名（　）は最大時
場所：避難所西宮市（＊中央市民体育館・大社小・神原小・＊平木中・＊高木小・用海小・＊大社児童館・若竹文化会館・ルーテル教会）芦屋市（山手小・＊精道小・精道中・打出浜小）神戸市（本山第三小・御影北・）でゲーム・ソングの指導。＊一は継続中。

13.避難所の子供たちの絵画指導（1/20～継続中）
日時：月から土　午後2時から4時
対象：幼児から小学生
指導者数：1ヵ所5名×8ヵ所＝計40名
場所：西宮市（中央体育館・浜甲児童館・大社児童センター・若竹生活文化会館・平木中学校芦屋市（精道小学校・精道中学校）神戸市東灘区（御影北小学校）

14.避難所の子供たちのカウンセリング（1/20～8/31）
日時：土・日午後2時から4時30分
対象：小学生から高校生
指導者数：5名
場所：西宮中央体育館・西宮YMCA・西宮ルーテル教会

15.ニュージーランド訪問と心のケアープログラム1
期間：5月7日から5月16日（9泊10日）
対象：被災を受けた小中学生28名
指導者数：団長1名カウンセラー1名リーダー1名インターネット1名
行き先：ニュージーランド・ワイヘケ島
プログラム：ホームステイ・交流会・観光・カウンセリング

16.ニュージーランド訪問と心のケアープログラム2
期間：5月12日から5月21日（9泊10日）
対象：被災を受けた小中学生28名
指導者数：団長1名カウンセラー1名リーダー1名インターネット1名
行き先：ニュージーランド・ワイヘケ島
プログラム：ホームステイ・交流会・観光・カウンセリング

17.ニュージーランド訪問と心のケアープログラム3
　期間：5月19日から5月28日（9泊10日）
　対象：被災を受けた小中学生28名
　指導者数：団長1名カウンセラー1名リーダー1名インターネット1名
　行き先：ニュージーランド・ワイヘケ島
　プログラム：ホームステイ・交流会・観光・カウンセリング

18.被災地の子供たちのためのデイキャンプ
　対象：被災地の小学生50名指導者10名
　日時：5月14日（日）9時～5時まで
場所：YMCA六甲研修センター（六甲山）
　内容：ハイキング・ゲーム・クラフトなど

19.被災地の子供たちのためのデイクルーズ（6/25～6ヶ月）
　対象：被災地の小学生55名指導者15名
　日時：毎月第4日曜日9時～5時まで
　場所：大阪北港ヨットハーバー
　内容：ヨットクルージング・ゲーム・クラフトなど

20.被災地の子供たちの3泊キャンプ
　対象：被災地の小学生100名指導者20名
　日時：3月26日（日）～29日（水）3泊4日
　場所：YMCA余島センター（小豆島）
　内容：海洋プログラム（ヨット・カヌー・カッターなど）

21.被災地の子供たちの2泊キャンプ
　対象：被災地の小学生100名指導者20名
　日時：5月3日（祝）～5日（祝）2泊3日
　場所：YMCA阿南国際海洋センター（徳島県阿南市）
　内容：海洋プログラム（ヨット・カヌー・カッターなど）

22.被災地の子供たちの1泊キャンプ
　対象：被災地の小学生50名指導者10名
　日時：6月3日（土）～4日（日）
　場所：YMCA六甲研修センター（六甲山）
　内容：ハイキング・ゲーム・クラフト・キャンプファイヤーなど

23.被災地の子供たちの1泊キャンプ
対象：被災地の小学生50名指導者10名
日時：6月10日（土）～11日（日）
場所：YMCA六甲研修センター（六甲山）
内容：ハイキング・ゲーム・クラフト・キャンプファイヤーなど

24.ジェリー藤尾ともちつき大会
日時：3月5日（日）10時～5時
場所：西宮YMCAグランド
参加者：約1000名ボランティア50名

25.元NHK歌のお兄さんお姉さんコンサート
かしわてつ・しゅうさえこ
日時：3月20日（月）10時～12時
場所：西宮YMCA中庭
参加者：約200人ボランティア20名

26.カントリーミュージックコンサートと炊き出し
日時：3月26日（日）
場所：西宮YMCAチャペル・中庭
参加者：約2000名ボランティア50名

27.スパッゲッティーとコンサートとビンゴ大会
対象：被災地の幼児から高校生2000名
日時：5月28日（日）午前11時～3時
場所：西宮サニーボランティアハウスほか
内容：模擬店・ビンゴ大会・救援物資配布・ゲーム大会・コンサート

高齢者・障害者への援助活動

28.仮設住宅の段差解消プログラム（4/1～継続中）
対象：仮設住宅に住んでいる高齢者約200軒
内容：仮設住宅の段差解消のためにブロック2ヶ・手作り本箱1ヶをセットにして配布。

29.引っ越し手伝いプログラム（1/20～8/31）
対象：全半壊の住宅・仮設住宅入居者
内容：全半壊の住宅からの荷物の搬出・仮設住宅への引っ越し手伝い

高齢者の心のケアープログラム

30.在宅高齢者・障害者の訪問援助プログラム（1/20～継続中）
　日時：毎日10時から4時30分
　対象：被災を受けた高齢者・障害者1日5～10名
　指導者：5～10名
　内容：話し相手・生活物資の配達・買い物の手伝い・その他

31.被災地の高齢者のための温泉日帰り
　日時：3月11日（土）9時～5時
　場所：石切ホテルセイリュウ
　参加者：高齢者40名ボランティア10名計50名

32.被災地の高齢者のための森林キャンプ1
　対象：被災地の高齢者30名
　日時：7月17日（月）～20日（木）3泊4日
　場所：YMCA呼子高原センター（鳥取県）
　内容：自然観察・森林体験・バードウォッチング・皆生温泉泊など

33.被災地の高齢者のための森林キャンプ2
　対象：被災地の高齢者30名
　日時：9月18日（月）～21日（木）3泊4日
　場所：YMCA呼子高原センター（鳥取県）
　内容：自然観察・森林体験・バードウォッチング・皆生温泉泊など

生活ボランティア

34.電気修理ボランティア（2/1～4/30）
　ビデオ・テレビ・カセットデッキなど100件の修理

35.理容・散髪ボランティア（2/1～4/30）
　日時：毎週月曜日10時～4時
　場所：西宮YMCA
　参加者：理容師4名1日30～40人

他団体との協力

36.NVN（西宮ボランティアネットワーク）協力プログラム（2/3～継続中）
春の選抜甲子園3大キャンペーン（3/26～4/1）
（ゴミの持ち帰り・プライバシーの保護・地元での買い物）
西宮っ子フェスティバル（5/3～5）
（ゲーム・シクリエーション担当）
郵パックの開封・仕分けの応援（2/10～8/31）
（42万個・各体育館ほか）

37.その他協力関係
地元NGO連絡協議会・NPO（応援する市民の会）・関西学院大学・大手前女子大・大阪大学・大阪市立大学・キリスト教短期大学・川崎医科大学・福井医科大学・大学生協・（福祉）サポート21（難民を助ける会）・（社）日本青年会議所・国際ロータリークラブ・国際ワイズメンズクラブ・国際ゾンタクラブ・女性ライフリイクル研究所・日本聖公会・日本キリスト教改革派教会・日本福音ルーテル教会・六甲アイランド自治会・朝日新聞厚生文化事業団・日本レクシーション協会・その他

その他

38.サハリンへの救援物資送付
5/31AMDAのチャーター機にテント・毛布・食料など40箱。
6/13NGOチャーター船に防寒具20箱。

以上

編集後記

戦後（敗戦）50年の節目の今年1月17日（火）突然起こった未曾有の阪神・淡路大地震は死傷者、倒壊家屋をはじめ私たちのライフラインに甚大な被害をもたらしました。

大阪ＹＭＣＡでは発生後すぐ緊急救援本部がもうけられました。そして、日本ＹＭＣＡ同盟の方針のもと、被災地にあります西神戸ＹＭＣＡ（長田地区）での活動を支援するため神戸より西にあります各地のＹＭＣＡが応援することになり本部を神戸ＹＭＣＡに置きました（交通事情で京都ＹＭＣＡは西神戸ＹＭＣＡを担当）。一方大阪ＹＭＣＡより東地区のＹＭＣＡは西宮ＹＭＣＡでの救援・復興活動を支援することになり東本部を大阪ＹＭＣＡに置きました。

私は東本部（大阪ＹＭＣＡ国際・社会奉仕センターに設置）の事務局責任者としてかかわってきました。

この小冊子は東本部が応援しました西宮ＹＭＣＡでの活動の一端です。しかもこれはひとりの当時現場担当責任者でありました西宮ＹＭＣＡ館長山口元氏の日記です。

さまざまな形で、阪神・淡路大震災の救援活動にかかわった人達また、被災を受けた人達の記録が私たちの目にとどきます。救援活動の報告、記録の仕方もさまざまあります。

今回、被災者であり、ＹＭＣＡの現場責任者である一人の悩み、苦しみ、慣り喜び、祈りの声を聞き、少しでも私たちが何をしてきて、何が問題であったのか、そして多くのひとたちから励まされ、応援を受けたことを知ることができればと思いここにお届けしたしだいです。

あらためて、皆様の暖かいご支援に感謝申し上げます。

1995年11月1日
大阪ＹＭＣＡ　真嶋　克成

山口　元（1951・10・14）44才
・前西宮ＹＭＣＡ館長
・社会福祉法人　光朔会　専務理事
・特別養護老人ホーム　オリンピア　建設中
・平安女学院短期大学非常勤講師

大阪ＹＭＣＡ国際・社会奉仕センター
〒550　大阪市西区土佐堀1－5－6
ＴＥＬ　06－441－5598
ＦＡＸ　06－443－0739

※この冊子をご希望の方は右記ＹＭＣＡ国際・社会奉仕センターまでお問い合わせ下さい。

神戸大学人社系図

00098105256